

— 報 文 —

幼稚園における絵本の読み語りに関する研究(1)
— 子どもの絵本の楽しみ方 —

長瀬 莊一 幸本 由紀子* 富本 佳郎**

A Study on Reading Picture Books to Young Children in Kindergartens (I)
— How to Enjoy a Picture Book in Young Children —

Soichi NAGASE, Yukiko KOMOTO and Yoshiro TOMIMOTO

要 旨

本研究は幼稚園における絵本の集団的な読み語り場面において、子どもの楽しみ方に焦点を当て、その内面の動きを把握することを目的とした。ここでは幼稚園4歳児30名に8冊の絵本に対する反応を観察とイメージ略画を用いた面接によって捉えようとした。結果、子どもは絵本に対して強い興味を示し、知的側面、感情的側面、意欲的側面など広範にわたって楽しんでいることが明らかになった。また、その楽しみ方や表現の仕方には個人差のあることも明らかになった。

キーワード：絵本 picture book, 幼稚園 kindergarten,
絵本の読み語り reading picture book, 楽しみ方 how to enjoy,
イメージ略画 sketched images, 個人差 individual difference

問題と目的

近年、社会全体の活字離れが問題になっている中で、成長期にある子どもたちにとって、絵本や本に触れるための文化的環境が注目されている。このことに関して、1999年に「子ども読書年に関する決議」が衆・参両院の本会議において採択され、2000年は「子ども読書年」と定められた。そして、2000年5月には東京・上野に国立「国際子ども図書館」が部分開館され、2002年5月には全館オープンになった。その間、全国各地の図書館では子どもの読書に関する行事が盛んに開催され、そこでは幼児期における読書活動を促進するために、推薦絵本の紹介や読み語りなどが行われてきた。

こうした子どもへの絵本の読み語りは、従来からも家庭や幼稚園などで日常的に行われてきたことである。しかし、それが行われている頻度については家庭によって、かなりの違いがあ

* 兵庫県豊岡市立豊岡ひかり幼稚園教諭

** 神戸女子大学名誉教授

り、幼稚園においても担当者によって指導に大きな違いが見られる。一般的にあって、幼稚園では絵本の読み語りに関する指導計画がまだ十分に立てられているとは言えない現状にある。

このことについて、「幼稚園教育要領」(1998)では絵本の指導の「ねらい」として「日常生活に必要な言葉が分かるようになる」とともに、絵本や物語などに親しみ、先生や友だちと心を通わせる」と述べられ、その「内容」の中で「絵本や物語などに親しみ、興味を持って聞き、想像をする楽しさを味わう」ことがあげられている。また、「内容の取り扱い」においては、幼児期に絵本に関わる体験の大切さと、教師は集団の中でその幼児なりの感じ方や楽しみ方を大切にしなければならないということ、幼児が落ち着いてじっくり絵本に触れることのできる環境づくりをすること、題材や幼児の理解力などに配慮して絵本を選択し、多様な興味や関心に応じることの必要性など、絵本に関する指導の目標と方法についての基本的な考え方が示されている。

ところで、絵本の指導に関するこれまでの研究の流れを概観すると、その多くは絵本の読み語りの意義を論じたものや、子どもにとっての好ましい絵本を指摘するものであって、最近になって、読み語りの過程そのものについての分析などの実証的な検討が見られるようになってきた(参考文献)。しかし、こうした実証的な研究はまだ緒についた段階とみるのが妥当であり、とくに絵本に対する子どもの受けとめ方のような、子どもの内面の動きについての理解は十分に明らかにされているとはいえない。

そこで、本研究では子どもたちがどんな絵本に惹きつけられ、どんな楽しみ方をしているかについて、実際の幼稚園における集団場面での観察と面接を通して、その内面を探ることを目的にした。

研究方法

研究の手続き

予備観察：はじめに、子どもたちと観察者とのラポールを確立するために、また子どもたちの行動を記録する方法について検討するために一定期間にわたって予備観察を行った。このことによって、できるだけ子どもたちの平常の行動を観察したいと考えた。

観察：目的とする場面において子どもたちが示す外面的行動を観察によって直接捉えるため、幼稚園4歳児クラスにおける日常の保育の中での絵本の読み語り場面を何回かにわたって継続的に自然観察した。記録方法はチェックリストおよび自由記述によって行った(付表1参照)。これらの観察による記録を補うためにVTR録画を行った。

面接調査：目的とする子どもたちの内面の状態を捉えようとするもので、上記の観察の後に、当日に読み語った絵本についての感想を筆者らが作成したイメージ略画(付図1参照)によってクラス全員の子どもに対して個別に尋ねた。このほかにも、子どもの側から進んで絵本に

に対する気持ちを伝えてきた時には、その発言を記録することにした。また、絵本を見たり聞いたりする態度や感想の異なる数名の子どもと個別に面接して、その絵本のどんなところが好きか、つまらないかについて質問し、絵本に対する興味や関心についての個人差を具体的に詳しく捉えることにした。その時の子どもたちの発言はテープレコーダーで録音した。

絵本評価：上記の観察および面接調査において用いられた絵本を対象にして、子どもたちが絵本のどんな要素に惹かれているのかを捉えるために、それぞれの絵本がどんな特徴を持っているのかを観点別に評価した（付表2参照）。

観察・面接調査・評価の実施

予備観察：神戸市内の私立T幼稚園の4歳児クラス30名（男児13名、女児17名）を対象に、2001年4月17日～7月10日まで計13回行った。対象児たちの観察開始時の平均年齢は5歳0ヶ月で、年齢の範囲は4歳7ヶ月～5歳5ヶ月である。

観察：上記の対象児に2001年9月～11月にかけて計9回、筆者の一人（幸本）が行った。

観察日：第1回	9月12日	第4回	10月10日	第7回	10月31日
第2回	9月19日	第5回	10月18日	第8回	11月7日
第3回	9月26日	第6回	10月24日	第9回	11月15日

時間：観察は午前9時30分～11時30分の間、絵本の読み語り場面だけでなく、自由遊び中の子どもたちの様子や、個々に絵本に関わる場面についても行われたが、教師によってクラス全体に対して絵本が読み語られたのは、このうちの5～15分である。

対象となった絵本：

- 第1回「ぼったのびょんこちゃん」（高家博成・文、仲川道子・絵、童心社、2000）
- 第2回「もりのなか」（マリー・ホール・エッツ・文・絵、間崎ルリ子・訳、福音館書店、1963）
- 第3回「ゴムあたまポンたろう」（長 新太・作、童心社、1998）
- 第4回「よーい どん！」（中川ひろたか・文、村上康成・絵、童心社、1998）
- 第5回「のろまなローラー」（小出正吾・文、山本忠敬・絵、福音館書店、1965）
- 第6回「しろいうさぎとくろいうさぎ」（ガス・ウィリアムズ・文・絵、松岡享子・訳、福音館書店、1965）
- 第7回「じごくのそうべえ」（田島征彦・作、上方落語『地獄八景』より、童心社、1978）
- 第8回「もりのなか」（第2回と同じものを再読）
- 第9回「ぼく そらをさわってみたいんだ」（さとうわきこ・文、岩井田浩行・絵、ポプラ社、1986）

観察場面：幼稚園4歳児クラスの保育室において、教師が絵本を読み語っている場面を中心にした上記の時間内の子どもたちの行動全般。

観察と記録の方法：絵本の読み語りの場面における子どもの並んでいる位置、教師の位置、観察者の位置およびVTRの設置位置は付図2のとおりである。

面接調査：

調査日：観察日と同じ。

対象児：観察対象児と同じ。

時間：読み語ってもらった絵本に対する感想は、読み語り終了後、保育に差し支えない時に個別に尋ねた。絵本に対する興味・関心について数名の子どもに尋ねる調査は、自由遊びの時間に行った。いずれも上記の観察時間内である。

調査方法：観察日に読み語ってもらった絵本に対する感想については、「さっき先生に読んでもらった絵本はどうだったかな？」と質問し、提示したイメージ略画（付図2）によって、「とてもおもしろかった」、「おもしろかった」、「わからない」、「つまらなかった」の4項目の中からあてはまる感想を一人ずつクラス全員の子どもに尋ねた。また、上記の項目を選択するばかりでなく、自分の気持ちを進んで表現する子どもの意見も聞いた。絵本を見たり聞いたりする態度や感想の異なる数名の子どもたちと個別に面接し、「絵本は好き？」、「どんな絵本が好き？」、「絵本のどこなところがおもしろい（つまらない）？」、「おうちでも絵本を読んでもらっている？」など、絵本に対する興味・関心について尋ねた。

記録方法：イメージ略画による感想の答えについては、「とてもおもしろかった」を①、「おもしろかった」を②、「わからない」を③、「つまらなかった」を④として、あらかじめ作成しておいた名簿に記録した（付表3参照）。

絵本評価：上記の8冊の絵本について、1冊ずつあらかじめ設定した観点（付表2）の1項目ごとに、3人の筆者の協議によって評定を行った。

結果と考察

1. 絵本の読み語り場面における子どもの反応

9回にわたる観察において、各回ごとにクラスの子どもたち全体が示した楽しみ方の特徴の概要は次のとおりである。下線の部分は子どもたちが楽しんでいる様子を表していると考えられるものである。各回の対象絵本の内容は（ ）に示した。

[第1回] 対象絵本「ばったのびよんこちゃん」

（とのさまバッタのびよんこちゃんが仲間のバッタたちと一緒に遊んでいると、シジウカラが飛んできて狙われる。助かったと思うとクモの巣にひっかかってしまい、食べられそうになるが、仲間たちに助けられる。）

バッタやカマキリ、てんとう虫など、子どもたちにとって比較的身近にいる虫が出てくる場面では、自分が知っているものを絵本で見る嬉しさが感じられた。たくさんの虫が描かれていて、小さい絵もあるのだが、子どもたちは絵の細部まで見ていて、「ここにこんな虫がいるよ？」と見つけることを楽し

んでいた。バッタが危機に遭う場面で強い反応を示したことから、子どもたちは主人公であるバッタに同一化しながら絵本の物語にふれていたことが推測される。

[第2回] 対象絵本「もりのなか」

(紙の帽子をかぶり新しいラップを持ったぼくは、森へ散歩に出かけ、ライオン、ゾウ、クマ、カンガルー、こうのとりの、さる、うさぎ、と出会い、森の中で一緒にハンカチ落とし、かくれんぼなどをして遊ぶ。)

表紙を見たときに否定的な反応を示したのは、子どもたちが絵本というものはカラーであるという概念を持っていたからではないかと考えられる。また、この絵本は絵が白く、背景が黒く塗りつぶされていて、図と地の描き方が反転しているため、子どもたちにとってなじみが薄いことも否定的な反応を示した要因としてあげられる。この絵本では、“かくれんぼ”という自分たちが体験したことがある遊びが絵本に出てきたことが嬉しかったと考えられる。

[第3回] 対象絵本「ゴムあたまポンたろう」

(頭がゴムでできているポンたろうは、山にボンとぶつかって空を飛ぶ。大男の角に当たったり、バラのとげに刺されたり、おぼけや木にぶつかったり、ハリネズミに蹴飛ばされたりして、世界一周の旅をする。)

“ポンたろう”という言葉の響きに惹きつけられ、楽しんでいた。ポンたろうの動きに合わせて、子どもたちは嬉しい表情をしたり、驚いた表情をしたり、面白がったりして、感情を自由に表出していた。

[第4回] 対象絵本「よーい どん！」

(「よーい」「うどん」でスタートすると、かけっこ、跳び箱、綱くぐり、縄跳び、…と、いろいろな種目が行われる。白組、赤組の応援団もたくさん出てくる、愉快的な運動会。)

「よーい “うどん”」, 「かけっこ かけっこ “こけっこ こけっこ”」という言葉の使い方に子どもたちは興味を持ち、楽しんでいた。運動会を経験した後なので、イメージがしやすく自分を投影しやすかったことが楽しむ要因として考えられる。また、さまざまなものの絵が出てくるので、それを答えたり、確認したりすることを楽しんでいた。絵の細部までよく見ていた。自分たちも、絵本の中に参加できるような絵本で、積極的に発言できることが嬉しいのではないかと推測される。

[第5回] 対象絵本「のろまなローラー」

(道路を直すローラーは重い車を転がしながらゆっくり動いている。スピードの速い自動車たちが次々とローラーを追い越していき、でこぼこ山でパンクするが、ローラーが平らに直すと、お礼を言いながら走って行く。)

ローラーの車を見たことがあるという自分の経験との結びつきによって、絵本を楽しんでいた。

[第6回] 対象絵本「しろいうさぎとくろいうさぎ」

(広い森の中に住んでいる白いうさぎと黒いうさぎは、毎日一緒に遊んでいたが、黒いうさぎは悲しい顔をして考え事をしている。白いうさぎと黒いうさぎは一生懸命に願い事をして、一緒に幸せに暮らす。)

物語とは直接には関係がないが、幼稚園にいるうさぎを思い出すことによって、絵本の中の物語を身近なものに置き換えてイメージをふくらませている。繰り返して出てくる言葉に敏感に反応し、面白というよりはむしろ、文の中に「ちょっと かんがえてたんだ。」という言葉がなぜいっぱい出てくるんだろうと考えている様子だった。絵が大きく描かれていて、子どもたちがうさぎの表情を受けとめやす

いので、子どもたちの驚いた発言や表情が強く現れていた。

[第7回] 対象絵本「じごくのそうべえ」

(綱渡りに失敗して地獄へ落ちた軽業師のそうべえは、出会った山伏、医者、歯拔師たちと、ふんによう地獄へ放り込まれたり、じんだんき(大鬼)に飲み込まれたりするが、豪快に暴れ回って、鬼たちを困らせる。)

強い感情の表出をしている。「鬼」に対して恐そうなイメージがあるが、それでも見てみたいという子どもの好奇心が現れている。面白い言葉や行動が出てくると、口に出して言ってみたり、追体験をしたりして物語を楽しんでいる。また、関西弁の言い回しが、子どもたちにとって身近で楽しめる要素であったと考えられる。鬼が大きく描かれていれば鬼になったり、主人公のそうべえたちがいたずらをする場面が描かれていれば、そうべえになったりして、場面によっていろいろなものに同一化して自由に楽しめる喜びを味わっていた。

[第8回] 対象絵本「もりのなか」(第2回と同じ)

再読してもらうことを喜んでいて。知っている話であるということ、子どもたちの好きな動物がたくさん出てくることが関心を示した要因であると考えられる。

[第9回] 対象絵本「ぼく そらをさわってみたいんだ」

(「そらって つめたいのかな、あったかいのかな」と思ったねこは、動物の友達に手伝ってもらって空をさわろうとする。すると、雷さんが降ってきた。ねこは友達とはしご段を作り、雷さんを空へ帰す。)

どのようにして主人公のネコが空をさわめるのか、次にどんな動物が出てくるのか、という期待をもって見ていた。自分の知っている、好きな動物が多く登場することにも興味を示していた。しかし、空をさわることができる、多くの子ども(とくに男児)が嬉しそうな表情をしていたのに対して、一部の女児の中には「そんな簡単にお空ってさわられるのかなあ。」と疑問をもっている者もいた。

以上が第1回から第9回までの絵本の読み語りに対する子どもたちの楽しみ方の特徴であるが、このことを含めて、子どもたちの行動全体を通した主な特徴としては次のことがあげられる。

- (1) 絵本によって子どもたちの示す反応は異なる。また、同じ絵本でも子どもたちの反応が異なることも見られ、個性が感じられた。反応の大きさはさまざまであるが、子どもたちは感じたことを表情や言葉や動作で表している。
- (2) 子どもたちは絵本の細部まで注目して見ている。絵の細部まで見落とさず、読み手である教師が見落としてしまっている場面でも子どもたちは発見していることがある。子どもたちは知っていることが出てきたり、知らないことを発見すると、とても喜んで見ている。
- (3) 子どもたちは絵を見ながら、語られる物語を聞いて、物語を理解し、言葉のリズムも楽しんでいるという風である。
- (4) 子どもたちは静かな物語の絵本よりも、動きや変化性に富む物語の絵本のほうが絵本に対する積極的な態度を示す傾向がある。

(5)子どもたちは絵本を見ていて感じたことを、友だちや教師と共感することを好んでいる。(集団で読み語りをするこの利点が表れている。)

(6)子どもたちは絵本の表紙をよく見ていて、絵本に対する期待を示す発言がよく出てくる。表紙によって子どもたちを強く惹きつけた絵本に対して、子どもたちは物語が始まって強い関心を示し続けていた。

(7)第1回目よりも回を重ねるにしたがって読み語りを聞く子どもたちの態度により大きな変化が見られた。すなわち、後の回になるにしたがって、絵本に対して大きな期待を持つように変容した。また、読み語り以外の日常保育の中でも、子どもたちが積極的に絵本と関わる姿が多く見られるようになった。

なお、子どもたちが何を楽しんでいるか、その内容について上記の下線部分に示されていることの意味を考えてみると、そこには次に列挙するような心理的要素が含まれていると考えられる。

- ・新しいことを知る
- ・すでに知っていることを確認する
- ・何かに疑問を抱く
- ・感情を自由に表現する
- ・いろいろと想像する
- ・自分の生活体験と結びつけて考える
- ・何かを見つける
- ・何かを期待する
- ・言葉の面白さに気づく
- ・他の人と共感する
- ・追体験する

2. 絵本の読み語り直後における子どもの感想

9回行われた絵本の読み語りについて、個々の子どもの感想をまとめたのが表1である。M1～13は男児、F14～30は女児であり、①～④は下の欄外の注に示すような回答の内容を表している。「欠」はその日は欠席であったことを示している。表2はそれを感想の回答別に集計したものである。

表3は各回の感想の回答別人数を全体および男児、女児別にまとめている(カッコ内の数字は%で、欠席者は除いて算出している)。表4は各回の子どもの感想から「面白さ」の程度を表したものである。ここでは「とてもおもしろかった」を4点、「おもしろかった」を3点、「わからない」を2点、「つまらなかった」を1点として重みづけをした。この重みづけを基にして、クラス全体および男児、女児の「面白さ」の平均値および標準偏差を示したのが表5および表6である。

これらの結果から次のような傾向が明らかになった。まず、全体的な傾向としては、

- (1)「面白さ」の程度は各回を通じて3点前後で、子どもたちは絵本の読み語りに対して肯定的な反応を示している。
- (2)男児のほうが女児に比べて絵本の違いによる反応の変動が大きい(第2回と第3回、および第2回と第7回の間)t検定で5%レベルの有意差がみられた。

表1 幼児の感想（各回の個人別比較）

	第1回	第2回	第3回	第4回	第5回	第6回	第7回	第8回	第9回
M 1	①	②	①	欠	①	③	欠	①	②
M 2	②	②	②	③	①	①	①	①	①
M 3	①	④	③	③	④	④	③	④	①
M 4	②	④	④	③	②	②	②	②	②
M 5	②	①	③	②	①	④	④	②	④
M 6	②	②	②	①	①	①	①	①	①
M 7	③	④	①	①	①	①	①	①	①
M 8	②	④	①	①	①	③	③	欠	②
M 9	③	②	欠	①	①	②	①	①	①
M10	②	①	②	欠	②	①	①	②	①
M11	②	④	①	②	④	④	①	④	②
M12	③	②	①	①	①	②	①	②	②
M13	①	②	②	③	①	①	①	①	①
F14	①	①	①	①	①	①	①	①	①
F15	②	④	③	③	②	①	①	①	①
F16	①	①	①	①	④	④	①	④	④
F17	①	②	①	①	②	②	④	②	④
F18	②	③	②	④	①	③	①	②	②
F19	①	①	①	①	①	①	①	①	④
F20	②	①	②	①	②	②	③	②	②
F21	②	①	①	①	①	②	①	②	①
F22	②	④	③	欠	③	④	③	④	③
F23	②	①	①	欠	①	②	②	①	②
F24	①	③	②	④	④	①	③	②	①
F25	②	②	②	②	②	②	②	②	②
F26	②	①	①	①	欠	④	①	④	①
F27	①	②	②	②	④	②	①	②	①
F28	③	②	①	②	①	①	①	①	①
F29	①	①	①	①	②	①	①	①	①
F30	②	②	②	②	①	①	①	①	①

表2 幼児の感想（各個人別集計）

①	②	③	④	欠
4	2	1	0	2
5	3	1	0	
2	0	3	4	
0	6	1	2	
2	3	1	3	
6	3	0	0	
7	0	1	1	
3	2	2	1	1
5	2	1	0	1
4	4	0	0	1
2	3	0	4	
4	4	1	0	
6	2	1	0	
9	0	0	0	
4	2	2	1	
5	0	0	4	
3	4	0	2	
2	4	2	1	
8	0	0	1	
2	6	1	0	
6	3	0	0	
0	1	4	3	1
4	4	0	0	1
3	2	2	2	
0	9	0	0	
5	1	0	2	1
3	5	0	1	
6	3	0	0	
8	1	0	0	
5	4	0	0	

注：①とてもおもしろかった ②おもしろかった ③わからない ④つまらなかった

(3)第2回と第6回は他に比べて面白さの反応が低い。とくに男児の低さが目立っていて、「つまらなかった」という反応が比較的多かった。

(4)第7回は男女ともに面白さにおいて最も高い反応を示した（しかし、「つまらなかった」という反応も2名あった）。

(5)一般に、女児の方が男児に比べて反応が高い場合が多いが、第5回、第8回、第9回ではその反対の傾向を示している。

(6)性差が大きく見られるのは第1回、第2回、第5回で、とくに第2回は最も大きな差を示している（第2回において、t検定で5%レベルの有意差がみられた）。

(7)反応の個人差については、第2回および第6回は男児において大きく、第5回および第9回は女児において大きい。

表3 各回の感想の回答別人数 (%)

<全体>									
	第1回	第2回	第3回	第4回	第5回	第6回	第7回	第8回	第9回
①	10 (33.3)	10 (33.3)	14 (48.3)	13 (50.0)	16 (55.2)	12 (40.0)	19 (65.5)	13 (44.8)	16 (53.3)
②	16 (53.3)	11 (36.7)	10 (34.5)	6 (23.1)	7 (24.1)	9 (30.0)	3 (10.3)	11 (37.9)	9 (30.0)
③	4 (13.3)	2 (6.7)	4 (13.8)	5 (19.2)	1 (3.5)	3 (10.0)	5 (17.2)	0 (0.0)	1 (3.3)
④	0 (0.0)	7 (23.3)	1 (3.4)	2 (7.7)	5 (17.2)	6 (20.0)	2 (6.9)	5 (17.2)	4 (13.3)
<男児>									
	第1回	第2回	第3回	第4回	第5回	第6回	第7回	第8回	第9回
①	3 (23.1)	2 (15.4)	5 (41.7)	5 (45.5)	9 (69.2)	5 (38.5)	8 (66.7)	6 (50.0)	7 (53.8)
②	7 (53.8)	6 (46.2)	4 (33.3)	2 (18.2)	2 (15.4)	3 (23.1)	1 (8.3)	4 (33.3)	5 (38.5)
③	3 (23.1)	0 (0.0)	2 (16.7)	4 (36.4)	0 (0.0)	2 (15.4)	2 (16.7)	0 (0.0)	0 (0.0)
④	0 (0.0)	5 (38.5)	1 (8.3)	0 (0.0)	2 (15.4)	3 (23.1)	1 (8.3)	2 (16.7)	1 (7.7)
<女兒>									
	第1回	第2回	第3回	第4回	第5回	第6回	第7回	第8回	第9回
①	7 (41.2)	8 (47.1)	9 (52.9)	8 (53.3)	7 (43.8)	7 (41.2)	11 (64.7)	7 (41.2)	9 (52.9)
②	9 (52.9)	5 (29.4)	6 (35.3)	4 (26.7)	5 (31.3)	6 (35.3)	2 (11.8)	7 (41.2)	4 (23.5)
③	1 (5.9)	2 (11.8)	2 (11.8)	1 (6.7)	1 (6.3)	1 (5.9)	3 (17.6)	0 (0.0)	1 (5.9)
④	0 (0.0)	2 (11.8)	0 (0.0)	2 (13.3)	3 (18.8)	3 (17.6)	1 (5.9)	3 (17.6)	3 (17.6)

注：①とてもおもしろかった ②おもしろかった ③わからない ④つまらなかった

(8)再読の効果(第2回の対象絵本を第8回に再読)については、男児に面白さの反応の上昇が見られた(第2回の男児の「面白さ」の平均値は2.4点だが、第8回では3.2点になっている)。

なお、個々の子どもに対する再読の効果をみるために、第2回から第8回への変化を個々に示したのが表7であり、それを変化の方向別に示したのが表8である。これによると、女兒においても変化が見られるが、上昇した者と下降した者とが同じくらいで、変化しない者が最も多かった。

個別的傾向としては、表4を基に第1回から第9回までの変化をタイプ別に分けると表9のようになる。これによると、A(高反応持続型)やA'(準高反応持続型)のようにどの絵本についてもいつも楽しんでいる者は男児7名、女兒8名、計15名で、全体の半数を占めているが、これとは反対にいつもあまり楽しんでいない者はわずかに2名であった。その他の者は絵本の違いによって反応が異なっている。先に述べた再読の効果については、個人として大きな変化を示した者もいる。大きく上昇した者としてはM4、M7、F15、大きく下降した者としてはF16、F26があげられる。

なお、全体的傾向と個別的傾向を合わせて考察すると、とくに次の二つの点が指摘できる。その一つは、子どもたちの絵本の楽しみ方には明らかに個人差があるということである。各回の対象絵本についての感想が個人によって大きく異なっているし、全体的に低い反応の傾向を示す絵本に対して高い反応を示す子どももいるし、また、それとは逆の場合もあった。

もう一つは、従来おとなが考えてきた子どもの絵本に対する好みは、実際の子どもの好みとは必ずしも一致するものではないということが示唆されたことである。第2回の対象絵本とした「もりのなか」は、これまでの代表的な絵本研究者の多くが子どもにふさわしい絵本

表4 面白さの程度（各回の個人別比較）

	第1回	第2回	第3回	第4回	第5回	第6回	第7回	第8回	第9回
M 1	4	3	4	—	4	2	—	4	3
M 2	3	3	3	2	4	4	4	4	4
M 3	4	1	2	2	1	1	2	1	4
M 4	3	1	1	2	3	3	3	3	3
M 5	3	4	2	3	4	1	1	3	1
M 6	3	3	3	4	4	4	4	4	4
M 7	2	1	4	4	4	4	4	4	4
M 8	3	1	4	4	4	2	2	—	3
M 9	2	3	—	4	4	3	4	4	4
M10	3	4	3	—	3	4	4	3	4
M11	3	1	4	3	1	1	4	1	3
M12	2	3	4	4	4	3	4	3	3
M13	4	3	3	2	4	4	4	4	4
F 14	4	4	4	4	4	4	4	4	4
F 15	3	1	2	2	3	4	4	4	4
F 16	4	4	4	4	1	1	4	1	1
F 17	4	3	4	4	3	3	1	3	1
F 18	3	2	3	1	4	2	4	3	3
F 19	4	4	4	4	4	4	4	4	1
F 20	3	4	3	4	3	3	2	3	3
F 21	3	4	4	4	4	3	4	3	4
F 22	3	1	2	—	2	1	2	1	2
F 23	3	4	4	—	4	3	3	4	3
F 24	4	2	3	1	1	4	2	3	4
F 25	3	3	3	3	3	3	3	3	3
F 26	3	4	4	4	—	1	4	1	4
F 27	4	3	3	3	1	3	4	3	4
F 28	2	3	4	3	4	4	4	4	4
F 29	4	4	4	4	3	4	4	4	4
F 30	3	3	3	3	4	4	4	4	4

として推薦しているが、今回の調査において取り上げられた他の絵本と比べてみて、それほど子どもたちの反応は高くなかった。むしろ、子どもたちは近年出版された絵本に対して高い反応を示している。

なお、子どもたちの絵本の楽しみ方をより詳しく分析するために、クラスの中から絵本を見たり聞いたりする態度や、絵本に対する感想が異なる数名の子どもたちを選んで、「好きな（または読んでほしい）絵本」と「どんなところが好きか、その絵本に対する思いなど」を尋ねたが、それらの回答の中には今回の調査で取り上げた絵本以外のものも含まれていた。これらの回答から絵本の楽しみ方の特徴についてみると、次のようなものがあげられる。

- ・ユーモア：おかしさ、物語の中の主人公のいたずら

表5 面白さの程度（平均値）

	第1回	第2回	第3回	第4回	第5回	第6回	第7回	第8回	第9回
全体	3.2	2.8	3.3	3.2	3.2	2.9	3.3	3.1	3.2
男児	3.0	2.4	3.1	3.1	3.4	2.8	3.3	3.2	3.4
女児	3.4	3.1	3.4	3.2	3.0	3.0	3.4	3.1	3.1

表6 面白さの程度（標準偏差）

	第1回	第2回	第3回	第4回	第5回	第6回	第7回	第8回	第9回
全体	0.65	1.14	0.83	0.99	1.12	1.14	0.99	1.06	1.02
男児	0.68	1.15	0.95	0.90	1.08	1.19	1.03	1.07	0.84
女児	0.59	1.02	0.69	1.05	1.12	1.08	0.97	1.06	1.13

(注)

*第2回と第3回の平均の差の検定

$$t = 2.321$$

$$d f = 28 \quad p < 0.05$$

5%の有意差で第3回の方が第2回よりも「面白さ」の程度が高い。

**第2回と第7回の平均の差の検定

$$t = 2.331$$

$$d f = 28 \quad p < 0.05$$

5%の有意差で第7回の方が第2回よりも「面白さ」の程度が高い。

***第2回の性差による平均の差の検定

$$t = 2.077$$

$$d f = 28 \quad p < 0.05$$

5%の有意差で女児の方が男児よりも「面白さ」の程度が高い。

表7 面白さの程度（第2回と第8回の比較）

(人)

第2回 \ 第8回		4	3	2	1
		男児	0	2	0
4	女児	4	2	0	2
	男児	5	1	0	0
3	女児	2	3	0	1
	男児	0	0	0	0
2	女児	0	2	0	0
	男児	1	1	0	2
1	女児	1	0	0	0

4:とてもおもしろかった 3:おもしろかった 2:わからない 1:つまらなかった

- ・変 化 : いろいろな場面展開, いろいろな登場人物あるいはもの
- ・動 き : 早さ
- ・言 葉 : 面白い言いまわし

これらの特徴は絵本の内容に関するものであるが、これとは別の要素として、気に入った絵本は何度も繰り返して見たい、読んでみたいという傾向もみられた。第7回の対象絵本として取り上げた「じごくのそうべえ」などは、子どもたちから自発的に「もっと見たい」と

表8 面白さの程度（第2回と第8回の変化）

変化		(人)		
		上昇	不変	下降
幼児				
男児	7	3	2	
女児	5	7	5	
全体	12	10	7	

表9 各個人の反応のタイプ

タイプ	反応内容	(人)		
		男児	女児	計
A	高反応持続型 (①、②のみ)	2	6	8
A'	準高反応持続型 (一部③)	5	2	7
A C	(一部④)	1	5	6
A' C	(一部③、④)	2		2
B	変動型 (①～④すべて)	2	3	5
C	低反応型 (③、④が半数以上)	1	1	2

希望する声も多く、その後、数週間にわたってその絵本を読む子どもの姿がよく見られた。

3. 絵本の評価

これは今回の読み語りにおいて用いられた絵本がどんな特徴を持っているかを、8冊の絵本のそれぞれについて観点別に評定したもので、その結果は表10に示すとおりである。表の中の○はそれぞれの観点について、左側の欄の言葉が示すようなポジティブな評価を表し、※は右側の欄の言葉が示すようなネガティブな評価を表している（ただし、下の欄外の注1にあるように、その評価はマイナスであるとはかぎらない）。

これによって、子どもたちが個々の絵本の「面白さ」について述べた感想の意味を探ってみた。「面白さ」の平均が比較的高かった絵本（③「ゴムあたまポンたろう」、⑦「じごくのそうべえ」）の共通点をみると、次のようなことがあげられる。

- ・他に比べて○が多く、※が少ない。（※の内容も⑦の“言葉がクール”のほかはプラスの要素である。）
- ・○のうち、共通のものは8項目あるが、文の内容に関するものが多い（空想性、ユーモア、意外性、冒険的要素）。絵については、鮮やかさと躍動性がある、また、表紙に魅力がある。
- ・そのほかに絵本③の特徴としては、色の種類が多く、明るいこと、絵本⑦の特徴としては、言葉の面白さ、しかしクールなこと、内容が賑やかなこと、変化が多く、絵本が大型であることもあげられる。

これとは反対に、「面白さ」の平均が比較的低かった絵本（②「もりのなか」、⑥「しろいうさぎとくろいうさぎ」）の共通点としては次のようなことがあげられる。

- ・○よりも※が多い。

- ・○としては終結の安心感と穏やかさがあげられる。
- ・※としては色が少ない、暗い、細かい、変化が少ないことがあげられる。
- ・全体として考えると、平穩で静かな雰囲気を感じさせるが、活気に乏しい。
- ・個別的特徴としては、絵本②は場面の数が多く、絵本⑥は色がやわらかで輪郭がぼんやりしていることがあげられる。

これらのことを要約すると、子どもたちは鮮やかな躍動的な絵が描かれていて、空想や意外性や冒険的要素に富んだユーモアのある文を伴う絵本に強く惹きつけられていて、どちらかといえば色が少なく、暗く、変化の少ない、静かで活気の少ない絵本にはあまり興味を示していない傾向があると考えられる。

表10 「絵本」の分析・評価の結果

		評価の観点	評定	対象絵本								評定	
				○	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦		⑧
文	文	文の数	多い				※			○	※	少ない	
		簡潔さ	簡潔	○		○	○				○	ない	
		リズム	ある				○			○	○	ない	
		言葉の面白さ	多い		※		○	※		○		少ない	
	体	言葉の意味	わかりやすい	○		○	○				○	わかりにくい	
		言葉の暖かさ	暖かい							※		クール	
		導入の期待感	大きい	○	○	○	○			○	○	小さい	
		終結の安心感	大きい	○	○	○		○	○		○	小さい	
	内容	ストーリー	わかりやすい	○		○					○	わかりにくい	
		空想性	豊か		○	○		※		○	○	乏しい	
		日常性	密接		※	※					※	離れている	
		ユーモア	富む			○				○		乏しい	
		意外性	多い	※		○		※	※	○		少ない	
		冒険的要素	多い	※		○		※	※	○		少ない	
絵	色	穏やかさ	穏やか		○			○	○	※		にぎやか	
		キャラクター	多い		○		○	※	※			少ない	
	彩	色の種類	多い	※	※	○		※	※			少ない	
		明るさ	明るい		※	○				※		暗い	
	形	鮮やかさ	鮮やか			○			※	○	※	やわらか	
		輪郭	はっきり						○	※	○	※	ぼんやり
		大きさ	大きい							○	○	小さい	
		細かさ	大まか		※	○	○	○	※		※	細かい	
	その他	変化性	多い		※			※	※	○	※	少ない	
		躍動性	強い		※	○		※		○		弱い	
全体	物語の表現性	わかる	○	○	○					○	わからない		
	絵本の大きさ	大きい	※			※		○	○		小さい		
	場面の数	多い		○		○			○	○	少ない		
	表紙の魅力	強い			○				○	○	乏しい		

注1：評価の観点のうち、日常性「離れている」、穏やかさ「にぎやか」、鮮やかさ「やわらか」、輪郭「ぼんやり」は※で表されているが、マイナスの要素ではない。

注2：空欄は評定が中程度の意味である。

<対象絵本>

- | | |
|-----------------|---------------------|
| ① 「ぼったのびよんこちゃん」 | ⑤ 「のろまなローラー」 |
| ② 「もりのなか」 | ⑥ 「しろいうさぎとくろいうさぎ」 |
| ③ 「ゴムあたまポンたろう」 | ⑦ 「じごくのそうべえ」 |
| ④ 「よーい どん！」 | ⑧ 「ぼく そらをさわってみたいんだ」 |

総合的考察

絵本に対する子どもの楽しみ方について、これまでの結果をまとめて総合的に考察すると、次のようなことが明らかになったと考えられる。

まず、日常の保育の中での絵本の読み語りの過程において見られる子どもたちの外面的行動からは、一時的に関心をそらす者がいるものの、全体としては絵本に対しては強い関心を持っている様子が見られた。また、その時の発言や動作から、どんなことを楽しんでいるかを推測してみると、その内容は知的な側面（新しいことを知る、知っていることを確認する、疑問を抱く、言葉の面白さに気づく、など）、感情的側面（感情を自由に表現する、いろいろと想像する、他者と共感する、など）、意欲的側面（何かを見つける、何かを期待する、追体験する、生活体験と結びつける、など）など広い範囲に及んでいることがうかがわれた。

次に、絵本を読んでもらった後の感想からも、子どもたちが絵本に対して強い興味を持っていて、絵本によって多少の程度の違いはあるが、大いに楽しんでいる内面の様子が明らかになった。そこでは単に‘面白い’という大まかな感想だけに終わるのではなく、その面白さについても程度の違いを感じていることが分かった。また、どんなことに面白さを感じているかについても、その感想の内容から部分的に理解できたように考えられる。すなわち、子どもたちは絵本の中の大きな変化や大きな動きに面白さを感じ、ユーモラスな動作や言葉による表現に惹きつけられ、そうした要素を持っている絵本に対しては繰り返し読むことを求める傾向のあることが分かった。

なお、この点について子どもたちから比較的高い反応を得た絵本についての筆者たちの評価では、絵が色鮮やかで躍動的に描かれているもの、文の内容が空想や冒険的要素に富んでいて、ユーモアや意外性を感じさせるものがある絵本が子どもたちの心を強く捉える傾向のあることが示唆された。

また、子どもたちの絵本の楽しみ方については、個人差のあることが予想されていたが、実際に調査の結果からも、同じ絵本に対して、その好みは‘面白い’から‘つまらない’まで多様であることが分かった。しかし同時に、種類の違ったどの絵本に対しても強い興味を持っている者、それとは反対にどの絵本に対してもあまり興味を示さない者、あるいは絵本の違いによって興味が大きく異なっている者、などのタイプの違いもみられた。また、観察の結果、子どもたちが絵本の楽しみを表現する仕方についても、感じたことをそのまま言葉で表現する者、友だちと共感しながら一緒に感想を伝え合う者、惹かれた絵が出てくると指さす者、じっと絵を見つめている者、読み語られる物語の面白い言葉に声を出して笑う者、などさまざまであることが分かった。ここには相手の身になって感じたり、共感的に相手を理解するという態度が育っていく大事な契機のあることも示唆された。

男児と女児との違いについては全体的にみて、この年齢段階では女児のほうが男児よりも絵

本に対する興味・関心は強いという傾向がみられた。しかし、絵本の種類によっては、たとえば第5回「のろまなローラー」のような乗り物絵本のように、男児のほうが女児よりも強い興味を示すこともあるが、一般に絵本の種類の違いに対する興味の変動は男児のほうが大きいと言える。また、今回取り上げた絵本に対する再読の効果については明らかに男児に認められ、女児には認められなかった。しかし、そのことは直ちに再読の効果が女児には一般にみられないということの意味するものではなく、少なくとも上記の絵本については第1回目の時から女児における興味が高かったために、再読の効果が表れにくかったと考えることもできるので、再読の効果における性差については、さらに今後の検討が必要であろう。

以上のように、子どもによる絵本の楽しみ方については、これまでは外面的に大まかにしか捉えられていなかったが、本研究ではこれまでよりも詳しく、子どもの内面を含めて深く理解することができたのではないかと考えている。

参考文献

- 1) P・アザール (矢崎源九郎・横山正矢 共訳), 本・子ども・大人, 紀伊国屋書店 (1932)
- 2) L・H・スミス (石井桃子・瀬田貞二・渡辺茂男 共訳), 児童文学論, 岩波書店 (1953)
- 3) 松居 直, 絵本とは何か, 日本エディタースクール出版部 (1973)
- 4) 渡辺茂男, 絵本の与え方, 日本エディタースクール出版部 (1978)
- 5) 松居 直, わたしの絵本論, 国土社 (1981)
- 6) 中川李枝子, 本・子ども・絵本, 大和書房 (1982)
- 7) 瀬田貞二, 絵本論, 福音館書店 (1985)
- 8) 松岡享子, えほんのせかい こどものせかい, 日本エディタースクール出版部 (1987)
- 9) 長谷川摂子, 子どもたちと絵本, 福音館書店 (1988)
- 10) 鳥越 信, 子どもが選んだ子どもの本, 創元社 (1990)
- 11) 三宅興子, 日本における子ども絵本成立史, ミネルヴァ書房 (1997)
- 12) 中村証子, 絵本はともだち, 福音館書店 (1997)
- 13) 渡辺茂男, 心に緑の種をまく 絵本のたのしみ, 新潮社 (1997)
- 14) 秋田喜代美, 読書の発達心理学, 国土社 (1998)
- 15) 文部省, 幼稚園教育要領 (1998)
- 16) 文部省, 幼稚園教育要領解説 (1999)
- 17) 佐々木宏子, 絵本の心理学, 新曜社 (2000)
- 18) 河合隼雄・松居 直・柳田邦男, 絵本の力, 岩波書店 (2001)

付表1 チェックリスト・自由記述の記録表

第〇回 〇月〇日 絵本名「

行動 \ 場面	表紙	1	2	3
発言する				
笑う				
興奮している動作				
気持ちを表情に表す				
立ち上がる				
よそ見をする				
ほかのことをする				
(自由記述欄)				

付表2 「絵本」評価の観点

絵本・書名「

1. 文

(1) 文体

文の数	多い	中くらい	少ない
文の簡潔さ	簡潔	中くらい	簡潔でない
リズム	とてもリズムカル	ある程度リズムカル	ない
言葉の面白さ	多い	中くらい	少ない
言葉の意味	とてもわかりやすい	わかりやすい	わかりにくい
言葉づかいの暖かさ	暖かい	中くらい	クール
導入の言葉による期待感	大きい	中くらい	小さい
終結の言葉による安心感	大きい	中くらい	小さい

(2) 内容

ストーリーの展開	とてもわかりやすい	わかりやすい	わかりにくい
空想性	豊か	中くらい	乏しい
日常性	密接	中くらい	離れている
ユーモア	富む	中くらい	乏しい
意外性	多い	中くらい	少ない
冒険的要素	多い	中くらい	少ない
穏やかさ	とても穏やか	中くらい	にぎやか
キャラクター	多い	中くらい	少ない

2. 絵

(1) 色彩

色の種類	多い	中くらい	少ない	モノクローム
明るさ	明るい	中くらい	暗い	
鮮やかさ	鮮やか	中くらい	やわらか	

(2) 形

輪郭	はっきり	中くらい	ぼんやり
大きさ	大きい	中くらい	小さい
細かさ	大まか	中くらい	細かい

(3) その他

変化性	多い	中くらい	少ない
躍動性	強い	中くらい	弱い
物語の表現性	よくわかる	中くらい	わから

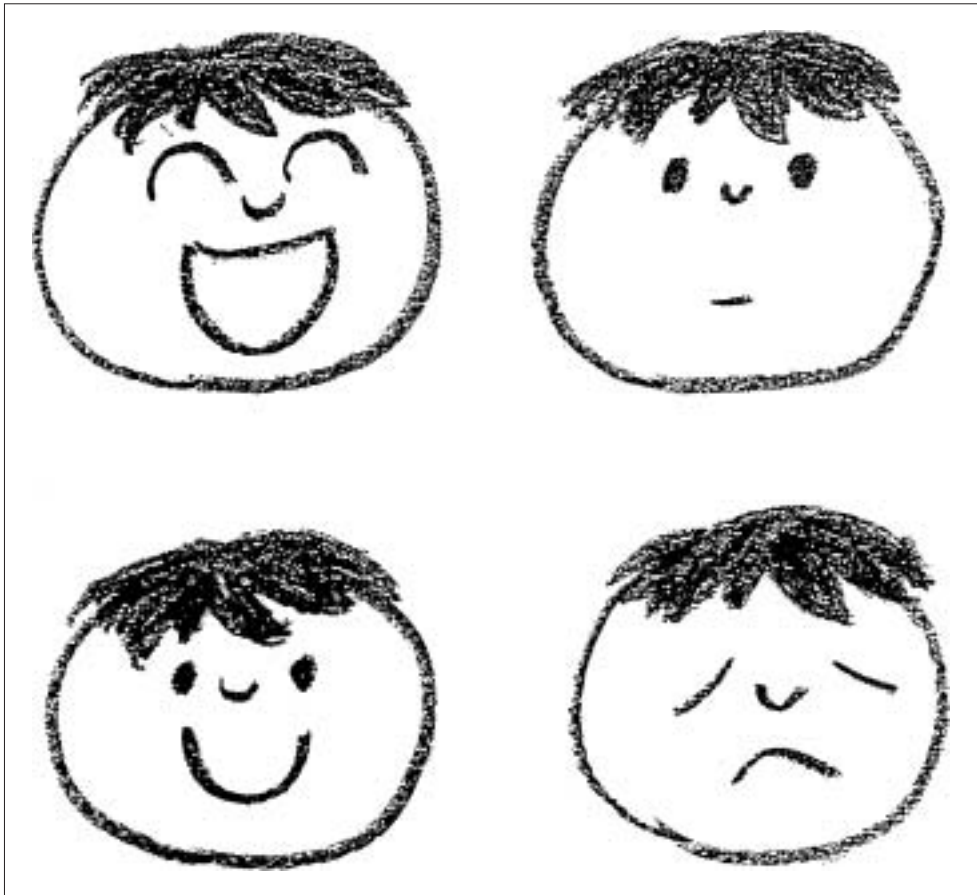
3. 全体

(1) 本の大きさ	大きい	中くらい	小さい
(2) 場面の数	多い	中くらい	少ない
(3) 表紙の魅力	多い	中くらい	少ない

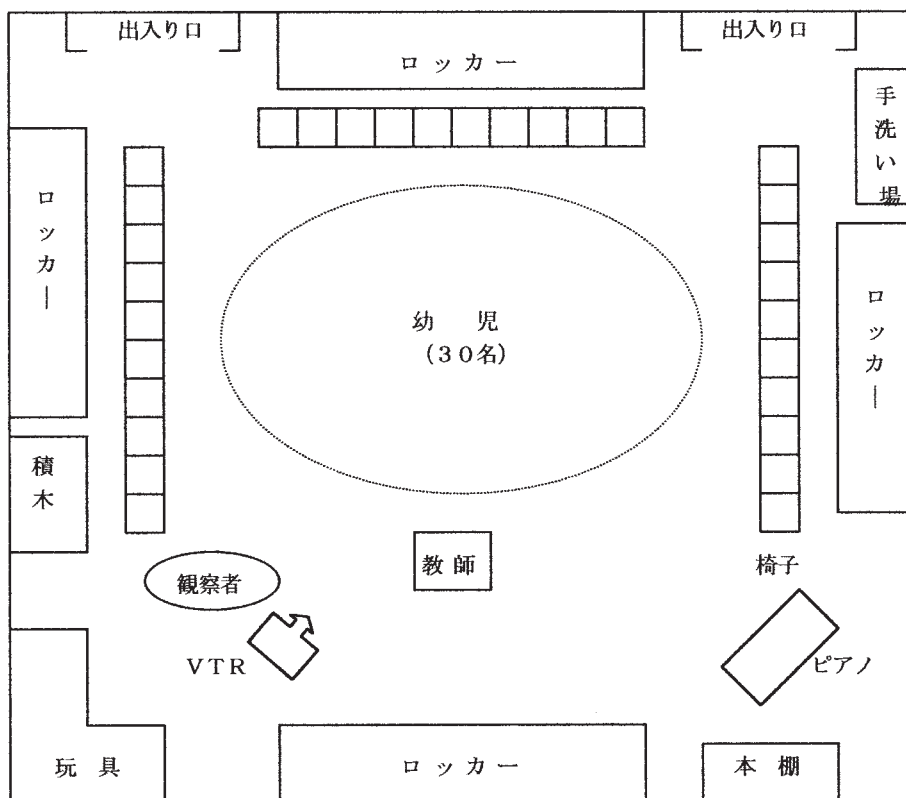
付表3 イメージ略画による感想の記録表（一部記入例）

番号	名前	第1回	第2回	第3回	第4回	第5回
M 1	S. N.	①				
M 2	Y. T.	②				
M 3						
M 4						
M 5						
M 6						
M 7						
M 8						
M 9						
M10						
M11						
M12						
M13						
F14	Y. K.	①				
F15	M. Y.	③				
F16						
F17						
F18						
F19						
F20						
F21						
F22						
F23						
F24						
F25						
F26						
F27						
F28						
F29						
F30						

①とてもおもしろかった ②おもしろかった ③わからない ④つまらなかった
 (欠一欠席)



付図1 イメージ略画
左上：「とてもおもしろかった」 右上：「わからない」
左下：「おもしろかった」 右下：「つまらなかった」



付図2 保育室での絵本の読み語り時の幼児、教師、観察者、VTRの位置